

サービスラーニングを振り返って

社会福祉学部 社会福祉学科 2年 桑嶋 歩実

活動先：NPO 法人 共育ネットはんだ

ゼミ：野尻 紀恵

私は、サービスラーニングを通しての自分の成長と気づきは2つある。

1つ目に自分の気持ち相手に伝える方法の気づきである。私が活動させてもらったNPO法人共育ネットはんだで障害児の学童保育（びりい部）に2回参加させてもらったため、障害児にどのようにコミュニケーションをとればよいのか、改めて考えさせられた。私の普段は声のトーンも低めで、声もあまり大きくなく、テンポも早いほうである。しかし、それでは初めて会った子どもには通じないのである。初対面であった障害児の女の子は問いかけには答えてくれるのだが、一切目を合わせてくれなかったのだ。そこで私の気持ちはその子どもに通じていないのだなと気づいた。

それに対して、私はいくつかのことに挑戦してみた。まず、話すテンポを遅くし、少し大きめの声で話しかけること、そして笑顔で話しかけることだ。リフレクションした際に自分の表情までは気にしておらず、基本的なことを忘れていたため改善した。

結果は、その子の反応は変わらずであった。しかし、学童保育（びりい部）は2回しかいっていないのでまだやる価値はあると自分自身で感じた。さらに職員さんから、いい着眼点であるとお言葉をいただきこれから障害児に問わず、人との接し方について見直すべきところがあると気づいた。

2つ目に、叱り方についてである。その時は、未就学の子供たちと農作業（親子 de 農園デビュー）をする活動であった。親子で参加するため、子どもたちはお母さん・お父さんに甘えていた。そこで、ある男の子がずっとお父さんとチャンバラごっこをしていた。しかし、男の子の気持ちが高ぶってしまい、つばをお父さんに吐いてしまった。その時お父さんは、子どもの目を見て叱っているところを見たのが印象的であった。そのどもは父親の目を見ながらごめんなさい、と謝り反省しているように見えた。そこで私は、「褒める」といった形の考え方が主になっており、「叱る」ということが悪いという考え方になっており、叱るということを避けているとその時に気づいた。子どもの視点に立ち、なぜ悪いのか、なぜいけないことであるのかを説明し、叱るということをしなければならないのだと感じた。叱ることは決して悪いことではなく、子どもたちの今後につながる大切なコミュニケーションの一つであると感じた。

このように、叱ることも伝えることに含まれるのだが自分の気持ちを伝えることの難しさをこのサービスラーニングで実感したのである。そして、私はサービスラーニングを通して自分の発言がどのように相手に伝わるのか、相手の立場になって発言することを考えるようになったのである。これからも自分の発言に責任を持ち、言葉の引き出しが増えて

いけばよいと感じている。

次に、活動を通して見えてきた地域活動や社会活動である。活動の一つに、ママびりい部という、利用している子どもたちの母親が NPO と話し合うといったものがある。ママびりい部では、子どもたちの近況報告や学童保育で作るご飯のレシピを考えたりするなど話し合いが行われた。そこでサービスマーケティング中の学生は質問を考えてきて母親に質問するという時間が設けられた。そこでの質問は自分の子どもに障害があると知った時どう折り合いをつけていき、家族の協力はどのようなものであるか、子どもの恋愛事情はどうであるか、これからどのような社会になってほしいかなどであった。

子どもに障害があると知った時、どう折り合いをつけていったのかについてであるが、発達が遅いと感じ病院に行きはやく病名をつけてほしかったという意見や、発達が遅いが、医者には障害ではないと否定してもらいたいという意見も上がった。そして家族の協力として、父親より親戚の方が面倒を見てくれるといった意見もあり、父親はコミュニケーションが下手だよ、とった意見もあった。しかし、父親もいなければ家庭は成り立っていない、自分が必死な時に夫が落ち着いていると周りがだんだん見えてきたりするなどバランスが大切であるとおっしゃっていた。そこから見える地域活動・社会活動としてママびりい部やほかにもおやじ会といったお父さんだけで集まる会もあり、それぞれの意見交換や家での愚痴をこぼしたりもするのである。そういう会を作ることで NPO 法人にはダイレクティブな意見がいただけるとおっしゃっており、よい機会となっているようである。このよきな普段聞きづらいことでも、このような会であったら言えるともおっしゃっていたので素晴らしい会だなと感じた。

次に子どもの恋愛事情についてである。子どもが好きな子がいる、いないにかかわらず、まだ小学生の子もいるのでまだ恋愛感情というもの芽生えていないかもしれない、の意見や●●ちゃんが好き！と言ってくれるわけではないので分からないという意見もあり、結局分からないという状態であった。しかし、子どもに好きな人ができたら嬉しい、応援したいと前向きな気持ちをおっしゃってくれた。そこから見えてきた社会活動として障害者でも恋はする、という理解が必要であると感じた。障害者だから恋愛感情などないと決めつけている人は少なからずいるのではないかということ、偏見をなくすために社会活動をしなければならないと感じた。

最後にどのような社会になってほしいかという質問についてはみなさん、自分たち親亡きあとも子どもたちが安心して生きていける社会環境になってほしいとおっしゃっており、どのような社会環境にすればよいのかは私たち福祉を学んでいる人たちに期待しているともおっしゃっていた。ここから見える地域活動・社会活動として、障害者の雇用問題や地域で暮らしやすいという環境づくり改善が必要であると感じた。環境づくりには NPO 法人や地域が密着して解決する問題もたくさんあると考える。そして、私たちのような福祉を学ぶ若者がもっと主張していき新しい風を巻き起こすべきであると感じた。

以上が活動を通しての自分の成長・気づき、活動を通しての見えてきた社会活動である。